

京都市・乙訓地域公立高等学校入学者選抜に係る 懇談会（第1回）の概要について

1 日 時 平成19年4月27日（金）午後5時～6時30分

2 場 所 ルビノ京都堀川 ひえいの間

3 概 要

（1）教育長あいさつ

（2）出席者紹介

（3）事務局からの説明

4 意見交換

- 生徒が目的意識を持って学び、進路希望を実現し、夢を高校で実現できるような選抜制度、通学区域の在り方が議論できればと思う。
- 主体的に行きたい高校を選択したい子どもが増えているので、選択肢の拡大が必要であり、子どもにとって良い制度としたい。
- 生徒が学校を選択するにあたって、オープンキャンパス等、高校の広報を充実してもらいたい。
- クラブ活動で、狭い地域の中だけではなくて、行きたい高校に行かせてやりたい。
- 交通もずいぶん便利になっているので総合選抜のいいところは残しつつ、もう少し選べる範囲が広がればいい。
- 改善にあたっては、交通網のこと、選択幅の拡大、これ以外にも様々な要素があるはず。そのあたりを出し合いながら検討を進めていき、より良い制度となればよい。
- 制度発足から年数が経って、デメリットが目についてきた。現行制度の良さを大切にし、かつ時代に即した子どもの希望を幅広く実現できるものにした。
- 現行制度は複雑であると思う。わかりやすい制度にしてもらいたい。あわせて子どもたちが自分の行きたい学校を広く選択できるようになればいい。

- 京都市内の専門学科を持つ高校は、すべての地域からどの生徒も選択できるという形になっている。普通科を志望する生徒についてはその枠の中でしか選択できない。そういう違いが普通科と専門学科にはある。しかし、選ぶ側の中学生からすれば普通科も専門学科も同じであり、普通科の高校は選ばれる側として、専門学科の高校と同じ選抜条件を持つことが必要であると思う。ある意味では制度はシンプルに、そして選択肢は多様にとというのがこれから求められる方向ではないか。
- 基本的には生徒が行きたい学校に行けるようなシステムが必要である。第Ⅱ類については通学圏の中で単独選抜の形になっているので、ある程度希望は満たされるが、第Ⅰ類は住んでいる場所、バス停方式によって限られている所に課題があるのではないか。
- 高校側の特色づくりが進む中、選ぶ側の中学生、保護者の意識が変わってきて、今の制度のままでは対応が出来にくくなっている。制度疲労という面が非常に目につくようになってきた。矛盾はかなり深まってきており、仕切り直しの時期が来ているのではないかと思う。
- 定時制・通信制については、交通網が発達し、地下鉄、JR、バスで多方面から生徒が来ている。
- 高校生の時にやりたいことが見つかって、そのことで一生懸命やるのが学習意欲を喚起し、いい形で物事が回っていくのではないか。総合選抜のいいところは残しつつ、生徒たちの行きたいという希望を叶えるような理想的な良い制度になればと思う。
- 通学圏を広くしていくならば、生徒に目的意識をしっかり持たせることが大事になってくる。中学校の現場としては、高校へ送り出したらそれで良いとは思っていない。高校とも連携を取り、その後をしっかりを見てやりたい。
- 生徒自身が高校を訪ねて、自分に合う合わないということを確認するのが非常に大事ではないかと思う。近年、情報が多い中、本当に自分が必要な情報を選ぶのが難しい。高校は複雑な有機体なので、学校説明会等に来校し、それぞれの高校の特色を見てもらいたい。

- たくさんある学校の中から子どもたちが自主的に選べるような環境が大切である。保護者からのアドバイスも先生からのアドバイスも大切だが、子どもの自主性で、自分から進んで高校のキャンパスに行くようになることが大切であり、そういった場面づくりが何かできたらと思う。

- 中学生の親としては、やはり公立高校なので地域の学校ということを忘れないでいただきたい。今風の特徴ばかりに走らないで、その学校の歴史を子どもたちに教えて欲しい。